其の二

子供の頃、小丸の祖父母の家で、家の外にある風呂に入っていた時のことです。

ふと暗い夜空に眼を向けた時隣の家の棟あたりの所を火の玉が煙のような尾みたいなものを引いて飛んでいるのです。何だかシューシュー音まで聞こえたように思えました。

と同時に叔母が「あ、火玉じゃ。見んな、見っといかんど」と大声で言うのです。驚いて風呂桶のふちに手を置いて目をつむっておりました。

しばらくして「もういいわ」との叔母の声に顔をあげたときはもう見えませんでした。

裏の竹藪の方へ消えていったのだそうです。

新山の「ほせきやき」

中尾　林　ツタエ

大正の頃のことです。大正時代の新山は、今とちがって山ばかりで、農家は数えるくらいしかなく、お隣といってもずい分行かないと見えませんでした。

その頃の山には大きい松・桧・杉の木などが薄暗いほど茂っていました。資産家の山々がたくさんありました。

その山々を火事から守るために防火線が作ってありました。その防火線に生えた雑木・雑草を年一回、「ほせき焼き」といって燃やしていきます。役場の方、地主さん、山の管理人、村の人達が、たい松や枯草などで次々に火をつけて防火線の両方から中の方へ燃やしていき、燃えたあとを杉の枝や松葉などで外に火が広がらないようにたたきながら消していきます。

山坂ではあるけれど、きれいに焼けたあとは広くて黒い大きい道ができ、子供達は珍しくて後の方から大人の真似をしながら小枝で焼けあとをたたいて進んだものです。

そんな行事もいつ頃まで続いたのかはっきりしたことは記憶にありませんが、本家の兄の話だと昭和十五・六年頃まで続いて、自分達も仕事に行ったとのことです。

春になると草の芽が出て、やがて紫色のきれいな「ねこ花」がいっぱい咲いて、手に取るとネコに触ったようにそれは大変柔かい産毛がついていました。

また、カヤの穂のツバナなどが出て、ままごとのご馳走になったものでした。今はネコ花を見ることもありません。もうなくなってしまったのでしょうか。

今は防火線のあった所もわからないほど農道や畑・鶏舎などができて、昔の面影は全くありません。

昔は、燃料には薪を使ったものでした。今はガス・灯油・電気で何でも食事を作ることができますが、終戦後までは薪ですべての食事を用意していたものです。また、消炭を作り魚などを焼いていました。農家では冬になると杭木の裏木や杉の葉など買って一年中の燃料を集めておきました。

村のおばさん達がリヤカーにたきもん（薪のこと）を積んで町に売りに行くのをよく見かけたものでした。

今は何でも便利にできて、山に木々が捨てられているのを見ると、便利になった世の中をこわく思う程です。

「十五夜まつり」

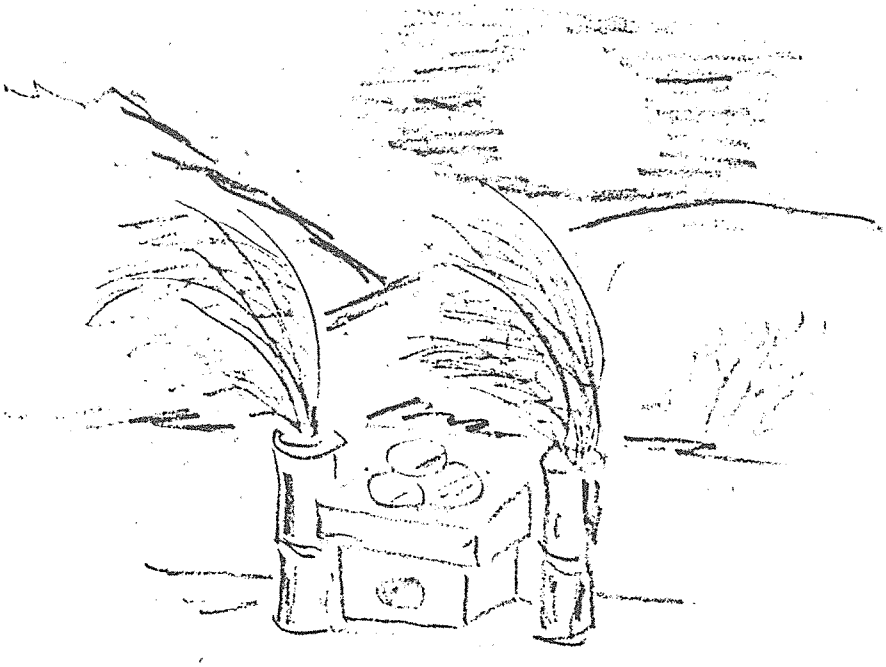
東平原　福永ミサヲ

大正年間、小学校時代の思い出として、平原地区の十五夜まつりがあります。旧暦八月十五日夜東平原公民館の北の通りの道路で行われたものです。

当日は、地区の青年が、早朝より山から竹やカヅラを切って来て、直径三十センチ程の大きなわら縄を作り、ちょうどお月様が中天に昇った頃から、老人はじめ、若者、子供、男女の別なく地区民が東西に分かれ、「エイサエイサ」の掛け声と共に綱引きが始まります。

一生懸命引きました。東が勝てば西小の庭まで、西が勝てば金刀比羅神社の下まで引いていったものです。それから、火の見やぐらの下で盆おどりが夜遅くまで行われました。

各家々では甘酒とか、果物を供えて、十五夜をお祝いしましたが、大変楽しくなつかしい思い出の一つです。



頼母子講（たのもしこう）

青木　酒井　暁

明治の末期のこと、秋深く村祭りも終わり、年の瀬も押し迫ったある日の夕暮れ時、父は一包みの土産を持って帰って来た。その包みは尾頭付（おかしらつ）きの魚と、昆布の煮付けであった。私どもは早速この土産をみんなで分けて食べあった。当時はこれでも大変なご馳走だった。少しずつ食べたがそのうまさは今でも舌に残っている。私が七つ・八つの頃である。

父が頼母子講に行って、自分は余り箸をつけず子ども達のためにと持ち帰ったもので、大きくなるにつれて父のこんな気持ちが身にしみて忘れられなかった。

父は、私が青年時代の頃この頼母子講についていろいろ教えてくれた。頼母子講の目的は、各自の貯蓄・借金返済など助け合いがめあての助け頼母子だった。

真面目な人でも、運悪く災害に見舞われたり、病気になったりすると金に困ることがある。そんな時、隣近所や親類等で相談し金か米を集めて助け合う手段である。

この頼母子には、金頼母子と米頼母子があった。

借金に困る人は金頼母子は出来ないので米頼母子が都合がよかったようである。

米頼母子には次のようなきまりがあった。

一、頼母子を起してもらう人を親と呼び、親の必要な目標額に合わせて米の俵数を定める

二、ここでは米　何俵で足りるとして、一人当たり掛け米一俵としてある人数を募集する

三、各自米一俵を供出し、集まった米を親に渡す

四、親はその時、初回の講を開く

講には講員全部を呼び、膳ごしらえでご馳走をする。費用は親が持つ

親になった者は、二年目から米一俵と、協議された利息を払う

講には世話人数名（奇数）をおき、世話人頭が指導する。

ほぼ以上のようなきまりのもとに講が開かれることになるが、親は助けてもらったお礼として、ご馳走と花くじ代を負担した。

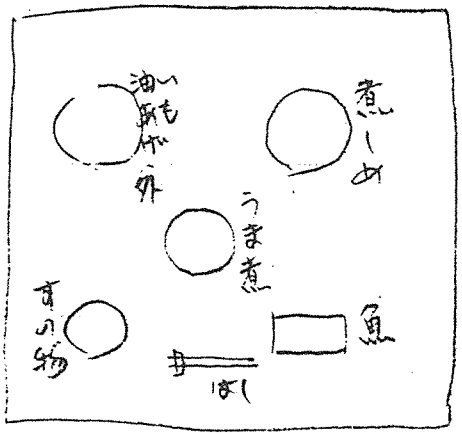
花くじは、毎回講員の時間厳守の意味もあり、全員にくじをひかせ小銭が当たるようになっていたが、講員の大きな楽しみであった。

第二次大戦終わり頃まで農村では銀行を利用する者が少なかった。銀行の手続きが大変面倒であったし、交通も不便だったので講が存続したのであろう。

※　ここにでてくる頼母子は金と米であるが、金を目的とするものに、牛・布団・たんす等の頼母子があり、また米だけでなく穀頼母子といって、ひえ・あわなどを対象としたものもあったようである。

高鍋藩では、天明八年に穀頼母子として穀物類を互いに持ち寄り社倉に入れておき、家・道・川の普請の際や火災その他の災害に備えたという記録がある。

膳ごしらえ



焼酎付き

市の山分校

中尾　岩切　久江

ＪＲバス高鍋西都線、市の山停留所の東の丘の上に市の山分校がありました。明治の終わり頃は、現在の市の山・中尾・牛牧には人家も少なく、学校に行く者も少なかったので小さい学校でした。

しかし歴史は古く、明治十七年には市の山の立山寅治氏宅を借りて市の山小学校を設立しています。その後明治十九年四月小学校令公布により簡易市の山小学校、同二十五年市の山尋常小学校と改称、同二十九年には最初に書いた市の山停留所の東に一、二年単級の校舎が新築されました。そして、明治三十七年上江尋常小学校が平原に分離独立した時、市の山尋常小学校は市の山分校となり、以来昭和四十一年まで続きました。

分校は、一年生と二年生だけで三年生になると本校（高鍋西小）に通学しました。

分校の毎日の勉強は一人の先生が、一年生と二年生を同じ教室で受け持たれました。

複式授業といって、一年生が算術（今の算数）の時は二年生は読み方（今の国語）で書き取りをしていました。唱歌（今の音楽）と体操（今の体育）の時間は一・二年いっしょに勉強していました。

入学式と卒業式は本校でしたが、本校へ行くのがとても嬉しくて前の晩は眠れない程でした。中でも一番嬉しく楽しかったのは運動会と遠足の時です。本校の児童といっしょなので私達も上江ん学校の児童だと思うと胸を張っていばりたくなるのでした。

でも、本校までは登り下りの多い山道で一、二年の子供にとっては大変な道のりだったのですが先生や友達と山道を歩くのは楽しく疲れも忘れてしまうのでした。しかし、次の日になると疲れが出て授業時間に遅れることもたびたびでした。

明治から大正の初め頃までは「かばん」もなく、算術や読み方の本・ノート・鉛筆もなかったので、石板・石筆ふきを風呂敷に包み、着物にわらぞうりで学校に通ったものです。

雨の日は、はだしで、本や勉強道具は肩から背中にか

けて斜めにくくりつけて通っていましたが、冬の寒い雨降りのときなどは手足も真赤になり、こごえてしまい、おまけに「ひび」が出来て痛くて痛くてたまりませんでした。

市の山分校のことを「山ん学校」と呼んで複式学級を一人で担任していただきましたが一代目は上江小薄の馬渡儀一郎先生、二代目が山下百太郎先生、そして黒木先生、菅原先生、柄本先生、岩下先生、河野富貴子先生、中谷先生、佐藤先生、黒木先生、長友先生と変わりました。

分校は昭和二十六年牛牧に新築移転しましたので、それまで使っていた校舎は中尾唐木戸に移し建てかえられ地区の人々の集会所となり引き続きお役にたっています。

牛牧に新築された市の山分校も明治十七年から数えて八十二年で廃校となり、今は牛牧保育園となって大勢の園児が楽しい毎日を送っています。

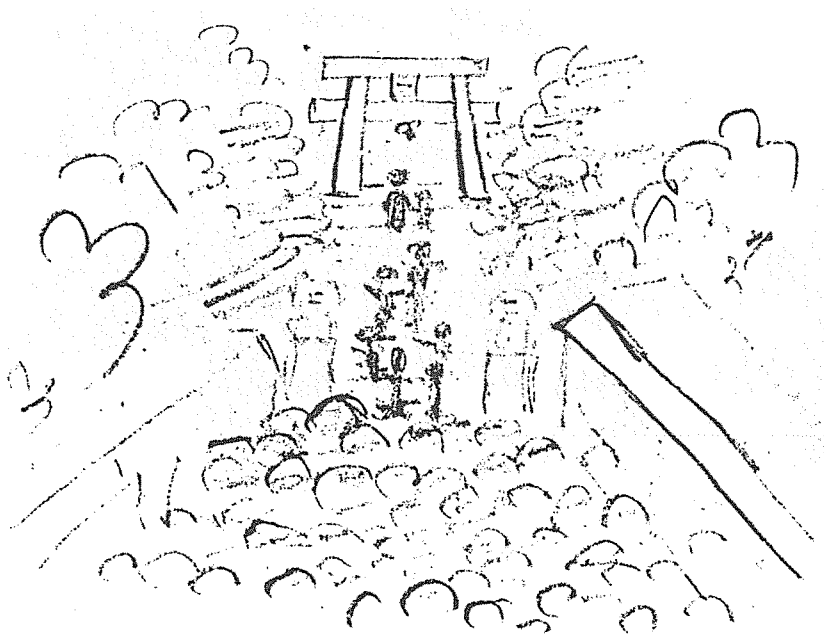
村まつり

蚊口中　三浦　千賀

きれい好きの祖母が、私の髪をお湯で湿しながらすき、赤いリボンで蝶むすびにし、顔もぴかぴかにふいてくれ、絹しぼりの帯を花結びにしながら「かわいいね」といって目を細めました。私はこっぽり下駄をはいて母の手をしっかりにぎって小走りでついて行く。落ち松葉の小路でした。

白壁の倉が見えるようになってからも路は遠かった。戸口を入るとなつかしい顔ばかり。おはぐろをつけたおばあさんが、「早くお上がり」と手を引いて、広い座敷におぜんが二列並べてある所に連れていってくれました。幼くとも母と並んで一人前のおぜんに座ってごちそうになり、大勢のお客さんとのお話が好きでした。

叔父さんの家は庭が広く、柿やみかんや山桃が何本もあって、いとこたちと鈴なりになっている金柑をいっぱいちぎって遊んだこともあります。大年神社のお宮では神楽もあり、お店で風船や手まりも買ってもらってとても嬉しかったものです。



子供の頃

道具小路南　松岡　美也

高鍋尋常小学校に入学したのが大正四年四月、今から七十余年も昔のことです。

その頃の学童は、絣や縞の木綿の着物にわらぞうりを履き（草履は一銭五厘か二銭位だった）勉強道具は風呂敷に包み、雨の日ははだしで永谷とか水谷原・太平寺等遠方からでも歩いて通学しておりました。

男の先生方が大部分で、黒色の詰襟の洋服、女の先生は着物に袴姿でした。

先生はとても厳しく怖い存在で、先生の言い付けなら絶対服従といった具合でした。

反面とても親切で優しく勉強の遅れた者は放課後残して教えてくださったものでした。

その頃は足洗い場というのがあって、そこに溜めてある水で、体操の時などはだしになったときは足を洗って教室へあがるのでした。

寒い冬の日などは、ひびがきれて血のにじむようなことも度々ありました。

家庭では、低学年の子供は自分専用の机も無く、飯台の上で宿題をしたり、畳の上にはらばって本をよんだりといった具合でした。

持ち本といえば学校の教科書位のもので、雑誌その他の本などはなかなか買ってもらうこともできませんでした。したがって学校から帰ると遊ぶことだけが楽しみで遊び道具もいろいろと苦心して作ったものです。

手作りの道具はもちろんのこと、遊び道具は空き箱や布の端切れ・欠けた茶碗・皿・棒切れでも大事な大事な

宝物だったものです。

この道具で遊ぶことが楽しくて面白くて時間の過ぎるのも忘れ、帰りが遅いといってよく叱られたものです。

明治・大正・昭和の時代を生きて平成の時代を迎え、昔を振り返ってみると、まるで夢のようですし、今の子供達にはこのような昔の話を聞かせても信じてもらえるものでしょうか。今の子供達のうらやましいような生活状況は昔の子供達には想像もできなかったことです。

編集後記

☆　高鍋地方に伝わるむかしばなしを集めようと「ふるさとを伝える会」が発足したのが昭和六十年で、会員の皆さんのご努力で民話・伝説・由来・思い出等合計九十五編を第一集・第二集として発刊いたしました。

情報化時代の今日、いろんな方法によって私達は文化の恩恵を受けていますが、この中にあって「たかなべむかしばなし」は地域に伝わる話を収録したものとして好評で、遠く東京・富山から注文があり、また町内小・中学校でもこの本を利用していただき感謝に堪えません。

☆　高鍋は、東が日向灘、南北と西が台地で、その台地に囲まれた中を小丸川・切原川・宮田川が流れ、縄文時代から人の住んでいる所です。

また、城下町でもあり、伝わっている「むかしばなし」には、それを物語るものがたくさん見られます。第一・第二・第三集をとおして韓国の百済王、秋月のお殿様、いろんな動物が出て来るのも特徴といえましょう。

☆　第三集の発刊をめざしての収集でしたが、古い話となるとどうしても高齢者の方々が対象となるわけでいろいろとご無理をお願いしました。

また、資料収集のため、何回も足を運び、一編に仕上げていただいた会員の皆さんのお骨折や小椋美義先生、永友千秋先生、古江悦郎先生の全文を通しての暖かいご指導に厚くお礼申し上げます。

（編者…岩村　哲雄）

※ 収集協力者

○高齢者ボランティア『ふるさとを伝える会』会員

会長　森　仲吉（鳴野）
〃　福永ミサヲ（東平原）
会員　上野正英（下屋敷）
〃　奥村ヤエ子（大工小路）
〃　河野花枝（宮越）
〃　財津モトエ（川田）
〃　西村　満（道具小路）
〃　原　重隆（竹鳩）
〃　林　ツタエ（中尾）
〃　松岡ミヤ（道具小路）
〃　三嶋　敏（羽根田）

※ 資料収集・調査・編集者

加藤秀雄（社会教育課長）
江川雅章（社会教育課長補佐）
古江悦郎（教育研究所）
岩村哲雄（社会教育指導員）